

高橋博久先生を送る

コミュニティ政策学部教授
山崎 丈夫

高橋先生は、名古屋工業大学における40年間の教員生活の後、本学部へ赴任されました。本学部では、ご専門の建築学の立場から、コミュニティ設計論などコミュニティのハード面の授業をご担当になりました。これまでの建築学の主流は、使いやすく、新しい「ハコ物」をいかにつくるかを競ってきたように思います。しかし、先生は、そもそも住民には、生活空間を自ら発見し、構想する力が存在しているはずである、という考えから、住民主体の生活空間構想論の確立に力を注いでこられました。

そこで、まちなかの生活地にある空間条件を発掘し、それを住民はどのように使いこなし、生活空間をどのように設計していくのかということを研究対象の中心にしています。とくに、まちの人々が既存の生活条件を利用して自らの生活要望を実現する、そのような取り組みに注目されています。民家の空き家を利用した共同保育所、学童保育所、宅老所、フリースペースなどは、まさに、生活施設（場所）をまちの人びとの力でつくりだしている事例です。先生は、これらの取り組みに暖かい眼差しを注ぎ、その活動に寄り添いながら研究をすすめてこられました。ここにも、「建築学は、住民の主体的な力を信じ、それを支援する学問である」という先生の考え方が貫かれています。

コミュニティは、生活地における問題解決に取り組む人間の集団である、ととらえると、まさに、先生は、その主体である住民のいきいきした多様な活動場所づくりの蓄積過程を、コミュニティ研究のなかに位置づけてまとめてこられた第1人者です。これらの研究成果は、教室内外での授業はもとより、学部としての共同研究蓄積をつくることに活かされてきました。先生が担当された「コミュニティ設計実習」は、学部のなかでもユニークな授業です。いろいろな構築物をつくったり、学舎内の掲示板を活用する工夫や敷地外の歩道のデコボコを補修する作業に取り組んでいるのをよくみかけました。先生は、地域と一緒に住む人々、歩道を使ういろいろな人々のことに思いをはせること、つまり、相手のことを考えることの大切さを授業を通して学生に伝えようとしていたのだと思います。そして、このような視点は、学外活動にも活かされ、IPA（子どもの遊ぶ権利のための国際協会）というNGOの日本代表も務められています。「子どもの遊ぶ権利とコミュニティ」は、先生の研究テーマの一つですが、子どもたちの発達を遊びの発展過程の中にみだし、それを国際的に交流しながら、理論と実践を結ぶ場として位置づけておられます。

このような先生の広く全体を見るという研究姿勢は、いろいろな場面で、まとめ役を務めていただくのに最適任の存在でした。とくに、2度にわたるカリキュラム改訂でのご活躍はその典型でした。多様な学問分野の総合によって成り立っているコミュニティ政策学部は、

それぞれの専攻分野の持ち味を活かし、その相乗作用をいかにつくりだしていくかが求められます。筆者が、微力ながら学部長を任ぜられていた折に取り組まれた平成18年度から実施するための新カリキュラム改訂は、大変大がかりなものになりました。学部教員の精鋭メンバーによるカリキュラム委員会が編成され、先生が座長に就任して作業がすすめられました。カリキュラムは、委員会の検討作業や教員全体による討論が十数回にわたって繰り返されるなかで、学部組織の成果としてまとめられました。

平成18年度からのカリキュラムの特徴は、学部教育改革方針で示した4つの学びのコースと公務員受験対策支援の道筋を明らかにすることにあります。改訂作業では、コミュニティ政策学の教育を整え、体系化が図られるとともに、わかりやすい科目名称にしていく努力がなされました。これまでの学部の歩みは、このような立場からの教育・指導を通して、現実を見る目、問題を発見する目、新しいことに挑戦する力を養いながら、高い理想のもとで、コミュニティを運営する人権感覚と社会力を備えた学生を養成することの積み重ねでした。先生は、本学部への赴任以来、このような教育の理想を実現するために努力されるとともに、それを教育カリキュラムとして形にしていく地道な作業の先頭に立たれたことを学部構成員一同、永く記憶に留めたいと思います。

また、先生は、所属教員が、学生指導にかかわる取り扱いの適否が問われるという学部にとっても厳しい局面では、学部に設置された調査委員会の委員長として克明な事実調査に当たられました。聴聞に応じない対象者に対峙して、傍証を含めて事実を整理していく毅然とした態度には、この事態によって学部を混乱におとしめてはならないという気迫が満ちていました。「高橋委員会」と呼ばれたこの取り組みは、多くの時間を費やす地道な活動でしたが、先生と委員による緻密な作業がすすめられ、その整理過程が報告されるにしたがって、教員集団の冷静な結束が強まっていくのを感じました。

研究委員長・コミュニティ政策研究所長を務められたときには、『学部紀要』、『研究所紀要』、『コミュニティ』（研究所機関誌）を定期的に発行する段取りを整え、シンポジウムや自治体と協働したワークショップ、研究交流サロンの開催など、研究活動の蓄積の場を整備すること、対外的に大学の研究蓄積を広げていくことを着実に実行に移されました。学外にコミュニティ研究の蓄積を広げていく場がシンポジウムや自治体などと協力した学習会であるとすれば、学部内で構成員の研究蓄積を交流する場が研究交流サロンです。サロンは、学部コミュニティの中に教員間のつながりの強いコミュニティを形成していく取り組みとして、教員・学生の参加によって続けられています。そして、サロン終了後の楽しみである、懇親会という「飲みコミュニティ」は、先生を囲んで1次会・2次会ととめどなくボルテージを上げる飲み仲間の心底からのつきあいの場となりました。これからも、引き続きいろいろな機会を通して、学部や研究所の発展のためにご協力いただきたいと存じます。

こうして、先生の足跡の一端をたどるうちに紙幅が尽きてしまいました。今後とものご壮健を祈念し、深甚からの感謝の気持ちを添えて、送る言葉とさせていただきます。